THE EVANGELICAL LIBRARY

EDITED BY THE

Rev. K. HOSHINO

THE PURE GOSPEL

BY

Rev. KOTA HOSHINO.

純正福音

牧師 星野光多述

259
554

020739-000-6

特52-544

純正福音

星野 光多/著

M42

ABI-0559

帝國圖書館
純正

牧師 星野光多 述

福音

東京 警醒社書店

明治
42 9 13
交内

純正福音

星野光多述

それ神はその生たまへる獨子を賜ほどに世の人を愛し給へり此は凡て彼を信ずる者に亡ることなくして永生を受しめんが爲なり。　約翰傳三章十六節

此數行の本文には聖書のうちに盈ち盈ちて居る大思想即ち人類の救に關する神の大經營及その救に與る由緣の要道が明示せられて居る。云はゞ此本文は聖書の縮圖である。されはその意味の深遠洪大なることは言はずとも明かと謂はねばならぬ。ワトキン博士は云ふた。聖書中此一節ほど多く説明を加へられた節はないが、亦聖書中此一節ほど少なく説明せられた節はないこと。その意は聖書中最も熱心に且細やか

に説明せられたること此一節に及ものはないが、それにもかゝはらず、此一節に籠つて居る思想は未だ大海の一滴ほども闡明せられて居らぬと云ふのである。ワトキン博士の此語、此一節を小福音と云ふたマーテン、ルーテルの語と相並べて見れば一層此節の奥床しさが解る。或る説教者が此一節を題として五十回餘の説教をしたと云ふ話を聞いたことがあるが、細かに別けて御話すればそれでも足らぬであらう。されば余が茲に讀者のために試みる所の本文の説明は固より不完全極まるものたるを覺悟せねばならぬ。

余が本文を以て純正福音と稱する次第は人類の救に關する要領茲に示され新約聖書の所説之を煎じつめれば、本文に於て示されたる要義に外ならぬからである。人類の救が聖書の目的思想であるが如く亦此本文の目的思想である故、余は此本文を以て吾人の救はるゝ由縁を明示するものとなし、此よりその内容を闡明しまうと試みる次第である。されば説明の順序は自ら下の如くになる。第一、救の本源。第二、救の方法。第三、救の條件。第四、救の内容。

第一　救の本源

それ神はその生たまへる獨子を賜ふほどに世の人を愛し給へりそは凡て彼を信ずる者に亡ることなくして永生を受けしめんが爲なり。

茲に神とあるは如何なる神を指すのである乎。讀者注意して此本文を讀まばその神は世界と離れて存在し給ふものなることが解るであらう。本文に於て世界は神の對象即ちその相手となつて居る。そこで、この神の、從來我國や東洋諸國に於て信仰されて居つた神や佛と同一

でないことが明白である。そも〳〵古來我國にて諸人信仰の對象となつた神々は八百萬以上もあると云ふがそれ等は悉く天地世界に屬するものである。或は世界の一部と云ふべきものである。天と地を父母としてその間に成り立てるもの、優れて秀でたもの、日月星辰禽獸草木偉人傑士、此等が崇められ祭られて神々となつたのである。天地あらざりし時に存在した神は一位もなく、孰れも皆な天地ありて後に出現したるものである。

次に本文に於て示されたる神は天地萬物を總合したるものを神として崇むる所の汎神的思想の神でないことが明白である。所謂其神は天地の外に別在する者でなく又天地の内に現在する者でもない。天地萬有そのものがその總體のまゝ即ち神であると云ふのである。基督教の神はそんなものではない。全く天地の外に獨立して存在したまふ神である。然らばその神は此世界に全く無關係かと云ふに決してそうでもない。極めて密接なる關係を持つて居るのである。今順序を立てゝ御話すればその神は第一造物者である。

「元始に神天地を創造たまへり。」（創世記一の一）神先きに在して後天地成立したのであつて、此神は天地の間に現出したのではない。天地がこの神によりて造り出されたのである。此神は第二に主宰者である。「エホバは統御たまふ全地は樂しみ多くの島々は喜ぶべし。」（詩篇九七の一）神は世界を造つただけで之を搆はぬと云ふ樣な不人情な御方でない。神は子を生みて之を育てることを知らぬ阿呆鳥の如きものではない。神はその家屋敷を賣拂つて山奥に逃げ込みて孤獨を樂む世棄人の如きものでない。神

は統御たまふ。而してその御政事たるや、大なる天地世界を治め給ふ耳ならず、小なる人事を顧み給ふ神である。否な人事どころか、小鳥一羽小花一輪も、その御恩惠の外には洩れぬのである。されば全地は樂み多くの島々は喜ぶべきである。此神は第三天父である。基督曰く

「爾曹の天の父は凡て此等のもの、必需ことを知り給へり」と。馬太七の三二。

凡て人類の必需ものを知悉し給ふ天の父こは神の本體を最も明白に示したものであつて、詮ずる所ろ基督の救は玆に發源したるのである。この神は能力の神である、智惠の神である、が、この神の最も貴くして難有ところは愛の神であるからである。神の本質は能力こ云はんよりは愛である。智惠こ云はんよりは仁である。仁愛無限にして人類に對して同情深き天の父なる神こそは、吾人が基督に因て示されたる神であつて、此神は座して罪惡中に沈溺せる人類を視るに忍びず、終にその獨子を遣はして之が救濟事業を成就せしめ給ふたのである。本文に「それ神はその生たまへる獨子を賜ふほどに世の人を愛し給へり」こあるは此狀態を言明したるものである。人類の救は人類自身の工風や骨折に發源したるものでなく、神の御心即ち仁愛に盈ち盈ちたるその御心より發源したのである。阪東太郎こ稱せらるゝ利根川はその本源を群馬縣上野國の北端に發する大河であるが、余が小供の時分聞た話に、利根川筋を溯りて利根郡の極奥に至るこ、その結局ところに一の地藏尊が立つて居て、そしてその乳房から清水がポタ〳〵こ滴つて居るが、それこそ阪東太郎の本源であるこ云ふて居る。是は果して事實かどうだかは知らぬが、よき譬こ云はねばならぬ。二千年の人類歴

史中に於て汪洋として漲り、而も至る所ろ、救ひの祝福を與へつゝある基督教の恩寵も、うの本源に溯れば實に天に在す父なる神の御心である。その本質愛にて在す天父こそは、實に基督によりて開かれし救の大本源である。

第二　救の方法

「それ神はその生たまへる獨子を賜ほどに世の人を愛し給へり、此は凡て彼を信ずる者に亡ることなくして永生を受しめんが爲なり。

救の本源が人の側面になくして神の側面にあるが如くに、救の方法も人によりて設備せられたのでなくして、神によりて設備せられたのである。救の方法とは果して何である乎。細かく取調ぶるときは色々と數ふべきものが出て來るが、その最も緊要大切なるものは簡單なる大事實であつて「その生たまへる獨子を賜ふ」とある本文のうちに言明せられて居る。基督教の中心教理は實に茲にある。吾人はこの一句のなかに、含まれて居る大思想を二つとする。而してその一は基督の神性であつて、その二は基督の十字架である。少しく進んで此二點を説明して見よう。

(一)　基督の神性

基督が神の獨子にして世界の未だあらざりし時既に神と偕に在したるものなることは新約聖書が認識主張して居る所であるが、抑も此信仰は如何樣にして成立したかと云ふと、吾人は之を基督の意識に歸せざるを得ない。彼には自ら神の獨子であるこの意識が存在して居つた。「父は我に萬物を予へ給へり父の外に子を識ものなく子及び子の現は

す所の者の外に父を識る者なし。」(馬太十一の二七)「そは父の死し者を甦らせて生しむるが如く子も己の意に從て人を生しむべし、それ父は誰をも鞫かず審判は凡て子に委ねたり、是れ凡の人をして父を敬ふ如く子をも敬はしめんが爲なり、子を敬はざる者は之を遣し〻父を敬はず。」(約翰五の二一―二三)「我を見し者は父を見しなり。」(同上一四の九)「我と父とは一なり。」(同上十の三十)と云へるが如き孰れも皆な彼が神の獨子たるの意識より發出したる斷片である。更に彼には自らは無罪なりとの意識があつた。凡そ彼ほど明かに罪惡を知つたものはない。亦彼ほど強く罪惡を感じた者はない。彼の眼には一人も無罪の人はなかつた。彼の觀た人類は悉く罪惡に感染して居つた。而かも彼は自らに於て罪惡を犯したとの意識がない。自ら內顧して純不垢の人とては、

古今の遠き、世界の廣き、耶蘇基督の外には曾て一人もないのである。更に彼は自己のうちに罪を赦す權威あるを自覺して居つた。罪に苦められて助けを求むる者に對つて彼は爾の罪赦さる我は爾の罪を赦すと云つた。更にまた彼は自己のうちに神の能力の盈ちて居ることを自覺して居つた。癩病患者が「主もし旨に適ふときは我を潔くなし得べし」と懇願した時、彼は無造作に手を患者に接けて「我旨に適へり潔なれ」と謂ひて之を癒したと記してある。福音書を通讀して彼の行へる所の奇蹟異能を見られよ。孰れも皆な無造作に行はれて居る。彼はその懷中にある金銀を望むがまゝに人に分け與ふる富者の如く、人の病を癒し鬼を逐出し死を活かし罪を赦して居る。而して何れの場合に於ても彼は當然の事として容易に之を行ふて居る。彼は此等の奇蹟異能を自

馬太八の二、三。

己のうちに盈たる能力の無盡藏よりして行ふたのである。凡て此等の事柄を總合して判斷を下せ。（イ）神の獨子たるの意識（ロ）無罪の意識（ハ）赦罪權の意識（ニ）全能力の意識。嗚呼此等の意識を有したる基督耶蘇は果して普通一般の人類たるに止む者と斷ずべきである乎。神の獨子が人類を救はんがために人となつて世に生れ出たことは基督教教理中の至大教理である。神が人類を愛して之を救はんが爲めにその獨子を世に遣はし給へること、是れ救の方法の前半である。而してその後半は彼が十字架に磔られた事と云はねばならぬ。

（二）基督の十字架

本文に十字架のことは明示されては居ぬが、併し暗示されて居ることは疑がない。「獨子を賜ふほどに世の人を愛し給へり。」此の本文の中には世の人のためにはその獨子が如何なる運命に陷るも惜まぬ後悔せぬこの意が籠つて居る。まして矧んや之を本文の前節即ち約翰傳三章の十四と十五兩節に於ける耶蘇の自白に結附けて見れば本文に十字架が言ひ籠まれて居ることは慥かである。曰く「モーセ野に蛇を擧し如く人の子も擧らるべし、凡て之を信ずる者に亡ることなくして永生を受けしめんが爲なり。」

抑も十字架の覺悟は、基督の心中に常住したるものであつて、晩年に及び萬事不如意なるより、漸やくその敗亡を覺悟し始めし古英雄などの心狀とは全く違つたものである。基督が始めて世に公然と現はれた時、バプテスマのヨハネは彼を一見して、人に告げて「世の罪を任ふ神の羔を見よ」。（約翰一の二九）と云ふたが、之は彼の覺悟を指摘

したものであつて、彼は之を聞いてヨハネを以て眞の知己としたのである。「竊賊の來るは盜まんこし殺さんこし滅ぼさんこするの外なし我來るは羊をして生を得かつ豐かならんしめん爲なり、我は善き牧者なり善牧者は羊のために命を捐」(約翰十の十、十一)こ云へる彼の告白は明かに十字架の覺悟を言明したるものである。彼は自ら死せざれば人を生かすこと能はずこ信じて居つた。「一粒の麥もし地に落ちて死ずば惟一にてあらんもし死なば多くの果を結ぶべし」(約翰一二の二四)で基督が自らの死を覺悟したることを證明すべき自白は其他多くある。一々茲に枚擧する暇がない。後世の智者學者が彼の死を何こ解釋しようが、彼自らの解釋は明かである。その死は人類の救はるゝために必要缺くべからざるものであるこ云ふこ、是れ彼自らの死の解釋であ

つた。

神の獨子たる意識を有したる彼、人の罪を赦す大權を有する事を自覺したる彼、神こ同一なる能力を有することを自覺したる彼、此の驚くべき基督は神性を有したものに相違ない。彼に奉事して居りし弟子等は終に彼を以て神の子こするに至つた。新約に於ける最初の敎會は彼を以て神の性德を備ふるものこ信じた。然りこの神の子が十字架に磔けられたことは深き仔細がなければならぬ。是れ則ち使徒等が宣べ傳へ基督敎會が主張する所の贖罪である。基督の死は實に人類の死である。人類の罪こ愆を負ふての死である。義者不義者に代りての死である。唯神の獨子が人間こなつたこ云ふ丈けでは人類の救はるゝ方法はいまだ完全せぬのである。その神の子が人類の罪の贖こなりて十字

架に磔られたと云ふこと、之にて救の方法は完成せらるるのである。使徒パウロが基督とその十字架のほかの事は何をも宣べ傳へまいと決心したのは是が爲めである。斯くして人類の救に關する神の設備は手落なく悉く完了したのである。救の本源は父なる神の御心に發源し、救の方法は神の獨子の肉體を取つて人となりしこと、十字架に死した

約翰一七の四。同一九の三〇。

ことによりて成就せられたのである。斯くして人類を救の饗宴に招待する福音の準備は悉く整ふたのである。基督が十字架に磔らるゝ前夜神に祈りて「爾の我に委し所の行は我之を成り。」と云ひ、いよ〳〵十字架に於て氣息絶なんとする時「事竟りぬ」と叫べるは、この意を洩したものと云はねばならぬ。人類の救に關して、神の側面に於ては最早や缺くる所がない。次ぎに考ふべきは人類は如何にして此の大なる救に與ることを得るやと云ふ問題である。即ちその救を得る條件である。

第三　救の條件

それ神はその生たまへる獨子を賜ふほどに世の人を愛し給へり此は凡て彼を信ずを者に亡ることなくして永生を受しめんが爲なり。

基督教は一名信仰の道ともさへ稱へらる程の教であつて、その信仰に重きを置くことは何人も知つて居る所である。「信じてバプテスマを受る者は救れ信ぜざる者は罪に定めらるゝなり。」(馬可一六の一六)とは人類の救はるゝと救はれざるとの區別を示した語であつて信ずると信ぜざるとが生死存亡の分水嶺である。然らば如何なる信仰が果して吾人を救ふかと云ふに、そは勿論神の遣はし給へる基督を信ずることで

あつて其信仰の要點は自ら左の二となる。

（一）耶蘇基督を神の子なりと信ずること。抑も信仰とは信任依頼の意を含むものである。サレバ基督が神の性質を有して居ることを信せざる者には兎ても眞の信仰が起るべき筈はない。何故なれば其人に取りては基督は二千年以前に生き又死した人である。彼は神の存在することは信じもしよう。神の能力と恩惠は信じもしよう。併し基督を信ずること即ち彼に信頼することは兎ても出來ぬ。彼に祈禱することは勿論出來ぬ。彼の助けを信じて安心することの出來ぬは云ふまでもない事である。然るに基督は曾て仰せられた。「夫れ我は世の末まで常に爾曹と偕に在なり。」と。然れども彼の神性を信ぜざる者が如何ぞ世の末まで地の端まで彼の在することを信ずることが出來よう。彼は約束

馬太二八の二〇。

せられた。「凡て勞たる者また重を負る者は我に來れ我汝曹を息ません」と。是は彼の語中最も貴く又難有き約束であつて、此約束は人類慰安の大本源、福音の宣べ傳へらるゝ所信ずる凡ての人を慰め且つ勵まして居る。併し彼の神性を信ぜぬ者は此語を讀んだ所で何等の安慰を感ずべき筈はない。サレバ基督の神性を認め彼の普徧現在を信ずることこそ吾人の信仰を活ける信仰ならしむるものと云はねばならぬ。

（二）十字架の贖罪を信ずること。十字架は新約の教會が人類の救に缺くまじきものとして信じたる所ろ、十字架は基督が人類の救に要せらるゝこゝして進で取りし所ろ、この十字架を取除き若くは無用のものとして仕舞ひ置く者は福音の眞髓を取去る者である。使徒パウロは云ふたではない乎。「それ十字架の教は沈淪者には愚なるもの我儕救は

馬太一一の二八。

哥林前一の一八。

る者には神の能たるなり。」と。又云ふたではない乎。「ユダヤ人は休徴を乞ひギリシヤ人は知慧を覓む我等は十字架に釘られし基督を宣傳ふ即ち此はユダヤ人には礙く者ギリシヤ人には愚なる者なり然ど召れたる者にはユダヤ人にもギリシヤ人にも、基督は神の大能また神の智慧なり。」と。

されば耶蘇基督を神の子と信じ、その十字架の血の贖罪を信ずること、これ吾人が凡ての罪より赦され神の子供とせられ永生を受け嗣ぐ者とせらるゝための條件と云はねばならぬ。

第四　救の内容

それ神はその生たまへる獨子を賜ほどに世の人を愛し給へりそは凡て彼を信ずる者は亡ることなくして永生を受けしめんが爲なり。

救の内容と云はんよりは寧ろ救はれたる者の狀態と云ふ方が適當かも知れぬ。上記の如くに基督を信じたる者の受くる救の恩惠は、消極的に云へば滅亡を免るゝことであるし、積極的に云へば永生即ち眞生命を受くることである。

（一）滅亡を免るゝ事。現在吾人の生活狀態が前後同一であるにも拘らず、只基督を信ずること信ぜざることによりて救はるゝと滅ぼさるゝとの區別があることは如何なる次第であるか。一例を擧げて說き明かそう。田畑の邪魔をする野葡萄に屬して榮へて居る枝は聽て本樹と共に刈り取られて燒かれる運命をもつて居る。その榮ゆることは適ま滅ぼさるゝために榮ゆるのである。併し一旦其野葡萄より切り取られて仕付けられたる善き葡萄の樹に接木せられた時は如何であるか。その枝

は如何に榮ゆるとも危險の身に迫り來る心配はない。榮ゆれば榮ゆる程園主の心を喜ばすのである。されば其枝の如きは實に死を免れて生に移りたるものと云ふべきである。基督曾て仰られた。「誠に實に爾曹に告ん我言を聞き我を遣し〻者を信ずる者は永生を有かつ審判に至らず死より生に遷れり。」と。抑も何故に吾人は現在の儘にしては滅ぼさるべきものである乎。客觀的に云へば神の公義聖德が宇宙萬有を統治するからである。主觀的に云へば吾人の內には罪惡が盈ちて居るからである。此公義は火である、この罪惡は荊棘である、火は必ず荊棘を燒き盡すに違ひない。然るに吾人は基督を信じて彼に結びつけられその枝となつた。基督は吾人を代表して吾人の罪惡を十字架に於て贖ひ給ふた。茲に於て吾人の罪惡が彼の苦痛と死とになつた如くに、彼の義と生命とが吾人の義と生命となつたのである。吾人彼に屬する者は彼に在りて凡の罪惡と咀とを免れ義とせられ祝福を與へらるゝのである。

（二）永生を受くること

永生とも云ひ眞生命とも云ふ。その含む所の意味は洪大である。結局基督の救は此所に達せざれば止まぬ。罪を赦すこと汚を潔むることは云はゞ器を空くすること清むることであつて、そは更に新しき貴きものを滿さんがためである。永生は無限の生存このみ理解すべきでない。完全圓滿の生命をも含むものである。眞善美の盈てる生命をも含むものである。愛と信仰と望の盈てる生命を含むものである。想像の及ぶ丈けを想像し言語の及ぶ丈けを云ひ盡すことするも、兎ても此

生命の内容を言盡すことは出來ぬ。故に此生命の實驗を有するパウロは云ふた。「神の己を愛する者の爲に備へ給ひしものは目未だ見ず耳未だ聞ず人の心未だ念はざる者なりと有が如し」と。

哥林前二の九。

余曾て米國費府に遊んで彼の有名なるジョン、ウナメーカーの店舗内を一巡したことがあつたが、二階の上り口に一大油繪の掛つて居つたのを見た。その油繪は古今の英雄豪傑が馬上行列をなして進行する所である。茲に世界の百傑轡を駢べて立現はれて居る。下方は一面に小石の如きものが敷きつめてある故、此は何所かの河原に於ける英雄の運動會であらうと思ふて暫く見て居つた。併し小石と見へたるものをよく〳〵見ると無數の白骨であつた。嗟「一將功成萬骨枯」とはよくも云つたものである。古今人間の歷史に大名を遺したる英雄豪傑は多くの人命を滅してその國を建てその名をなしたものである。英雄崇拜！。英雄を崇拜する者は宜しく知るべきである、御身の崇拜するその英雄は御身を助くる者にあらずして御身の血を流し骨を露してその功名を成すものであることを。然るにナザレの耶蘇は世に來りて何をなしたか。彼は英雄豪傑の如くに己が名利を博するために多くの人を支配し多くの人の生命を犧牲となしたのでない。否な彼は自ら謙りて人に使はれその生命を棄てゝ多くの人の贖ひとなられたのである。彼は或時慫慂として宣ふた。

約翰一〇の一〇。

「竊賊の來るは盜まんとし殺さんとし滅ぼさんとするの他なし、我來るは羊をして生を得且つ豐かならしめん爲なり。」と。嗚呼此れがために彼は世に出でた又死した。吾人は只彼を信ずるによりて其罪を赦さ

れて永生を得る、是れ本文の主張である、是れ純正惟一の福音である。

純正福音終

明治四十二年九月三日印刷
明治四十二年九月六日發行

定價金四錢

述者　星野光多

發行者　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　福永文之助

印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

發行所　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　警醒社書店　電話新橋一五八七　振替貯金口座五五三番

印刷所　横濱市山下町八十一番地　福音印刷合資會社

不許復製

宣教開始五十年紀念

傳道叢書

星野光多君編輯

▲眞の神
▲耶蘇の直說法　山田寅之助君述
▲神の現在　阿部清藏君述
▲運命と信仰　武本喜代藏君述
▲久遠實成の基督　柏木義圓君述
▲有情の神　平田平三君述
▲信仰とは何ぞや　光太郎君述
▲最大の學問　大谷虞君述
▲純福音　デフォレスト博士述
▲神を知る道　星野光多君述
▲基督の救　釘宮辰生君述
▲生命の福音　露無文治君述
▲福音の眞髓　今井壽道君述
▲信仰の要義　有馬純清君述
▲最大益事　小松武治君述
石坂龜治君述

（其他續々刊行）

259
554

○基督教叢書　星野光多君編輯　各一部　定價金廿錢　郵稅金四錢

△基督教辯證論　有馬純清君著
△基督教の本原眞理　露無文治君著
△聖書の價値　高橋卯三郎君著
△舊約聖書文學一班　今泉眞幸君著
△福音書概論　山鹿旗之進君著
△保羅と其著述　宮川巳作君著
△基督の比喩　八濱德三郎君著
△耶蘇の三大觀　星野光多君著

△基督の復活　小崎弘道君著
△靈魂不滅論　柏木義圓君著
△現世生活　山田寅之助君著
△現世と未來　武本喜代藏君著
△基督教の中心事實として祈禱　星野光多君著
△基督教小史　柏井園君著

（星野氏修養三書）

△基督教談叢（朝の卷）
△基督教思林（夕の卷）
△基督教通觀（聖日の卷）

紙數四百頁　定價金三錢
紙數四百二十頁　郵稅金七錢　定價金三錢
紙數五百三十頁　郵稅金八錢　定價金三錢

△甦りたる生命の主　星野氏述
△基督信徒の緊急問題
△基督信徒の一死一生